

対魔忍 調月リオの受難

— 成人向け —
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

「キヴォトス中の生徒が失踪する事件が発生。」

「生徒は一週間程度で発見され、何事もなく元の生活に復帰。」

「生徒たちはその間の出来事を何も覚えていない。」

「その犯人の情報を掴んだ——ってこと？」

「ええ、ミレニアムの監視ドローンの映像に映っていたわ」

「カイザーコーポレーションの元研究員で通称『プロフェッサー』」

「『神秘』について研究していたようね」

「リオがこの男の調査をするの？」



「ええ。神秘についての情報は
このキヴォオトスでも
限られた生徒しか知らない」

「これを無闇に生徒たちに
広めるべきではないわ」



「もちろん最大限の対策装備を用意したわ。
アビ・エシユフと方舟の技術を発展させた
この特殊スーツ」

「コレである程度の事態には
対応できるはずよ」



「それでも危険だよ」

「一人では
行かせられない」



「あのとき
ゲーム開発部を信じたように、
今度は私のことを
信じてくれないかしら。」

「——わかった。
危なくなったら、
ちゃんと連絡すること。
いいね？」

決行当日――

（あれは――
ミレニアムの生徒と、
それにカイザーの――）



「ん」
「お目覚めですか」
「……プロフェッサー……！」

「最近では神秘の効率的な抽出方法も
研究しております——」
「ッ——！」

「おお、ご存知とは。
光栄ですな調月リオ。」

「手荒な真似をして申し訳ございません
少々研究に付き合っていただきたく、
お越しいただきました」
「生徒の体から神秘を抽出、貯蔵する研究——」
「素晴らしい、そこまでご存知なのですな」

「『性的な快感』
これによって神秘の排出量が
一時的に向上する傾向にあります。」

「そう。残念だけど、
今のところ不快感しかないわね」
「そのようですね」

「知……」



「ではこれでいかがでしょう？」
「？」
「何か作動した——？」

ズン

ヒン

！？

ササ

「あんツ♡」
「おや。意外と可愛い声で
鳴いてくれるのですね」

「今…ッ何を…!!」
「神秘の力の応用ですよ」
「性的快感によって
神秘の排出量が増えるなら、
その逆も可能ということですよ」

「素晴らしい数値ですね
お気に召して何よりです」
「ッ！黙りなさい！」

さっきから体の
様子がおかしい
早くここから
脱出しないと――

「事前資料によると
あなたは陰核の感度も高いようですね」
「！？や、やめ――ッ
そこは――！」

「んおうツ♡♡」

「おや、神秘の力で感度が増しているとはいえ、
軽く弾くだけでとてもいい反応ですね」

「やめ…ッ触らないで…ッ」
「ふふ、素晴らしい数値です
感じてくださっている証拠ですね」
「くう…ッ」
ふ、ふざけないで…ッ
感じてなんか——ッ！」

「そうそう、忠告しておく
あまり快楽に抗いすぎると
ヘイローが壊れてしまいますよ」
「ヘイローが、壊れ…ッ!？」

「ええ、ですから
可能な限り素直に
快楽を受け取っておくのが
身のためですよ」
「そ、そんなッ♥♥♥引っ張ったら…ッ♥
食い込んで擦れ——ッ♥♥♥」

「ツくうううう」
「フフ、絶頂しましたね」
♥♥♥

「さて、捕まえましたよ」
「ああッ♥♥♥」

「ほらほら、ちゃんと答えないと
もっと快楽を増幅しますよ」
「ッ——くッ！」

「そう、よ——！」
「自慰を……ッしているわ……ッ！」
「いいですね、
どのくらいの頻度で
されるのですか？」

「他の生徒さんより少し大きめですね
責任ある肩書を持っていらっしゃいますし
溜まったストレスをコレで発散しているのですか？」
「黙っ……ッ♥♥そんなこと……ッ♥♥」

「じゅ、週にッ
イツ——
くううううッ♥♥♥♥♥♥♥♥」

「さて、最後の仕上げと
いきましようか」

「ツおおおおおおおおおおおおおツツ♡♡♡♡」

「で——電——ッ!?!
待って、そんなのツ当てたら、壊れ——ッ」



数時間後――

「第一段階はこれにて完了、ですね」

「あ、ああ――♡♡クリ、が――」

「ええ、ぷっくりと腫れ上がって

とても無様ですよ」

「そ、んな――」

ダメ、意識が――

「それでは
戻っていただいで
結構ですよ
青春の物語に」



「おかえりなさい、調月リオ」
「私の体に、何をしたの——！」

「前回の実験の際に
あなたの中の神秘を
直接刺激できるように
させていたいただきました」

それに

「前回の実験が
よほどお気に召したようですね
自慰行為の頻度も増えて
ほぼ毎日なさるようにな
りましたね？」

お
レ
シ
ッ
♡

「——今すぐ
その機械を止めなさい！
さもないと——」



「え？」

ガッ
ガッ
ガッ

「さもないと何です？」

「私に神秘の力を供給し続ける、
従順な家畜になった、
といったところでしょいか」
「そ、そんな——」

（そんな——
体が言うことを
聞かない——ッ）

ドサッ



「そんなあなたにプレゼントを
ご用意致したのです」

「ッ！？」

（これ——小さい、オナホール——！？）



「ご褒美にはおねだりが
必要ですよね？」
「あ、あ——」

（言葉が勝手に
頭に流れ込んで
いえ、違う——）

「わ、私のクリトリスは
プロフェッサー様の物です——
無様に育った私のクリトリスを
あなたの手で処刑してください——
♡」

（これが私の、本心——
心の底から、プロフェッサーに
屈服してしまっている——♡）

イッ

キ

ビクビク
ビクビク
は

♡

♡

「よくできました
ほら、見えますか？
期待してパンパンに勃起したクリが
今にも弾けそうですよ」
「あっ♡あっ♡プロフェッサー様あ♡
早くっ♡はやく壊してっ♡♡」

「ふふ。ではいきますよ」

「ああッ！？クリの根本っ♡
掴まれてッ♡♡」

「これで陰核を固定して、
常時神秘の力を絞り上げられ
るというシステムです
いかがですか？」

「ひぎやうッ♡溶けるっ♡
クリトリス食べられてッ♡
溶かされちゃうッ♡♡」



「これッ♡
これひゅきッ♡
ひゅきでひゅ♡♡」
「お気に召したようで何よりです」

（だめ、ッこれ
思考が——ッ
クリ快樂に呑み込まれる♡♡）

「さて、まだ壊れていませんか？
では今度はコレにご奉仕していただきましょう」
「ああッ♡だ、男性器——♡」

「い、入れてっ♡入れてくださいっ♡♡」
「ふふっ、もう準備は十分、といった
ところでしょうかね
では——」

クリ快樂に呑み込まれる——♡♡

「チンポ、と呼ぶように。

いいですね？」

「ち、チンポっ♡チンポおッ♡」

「これがミレニアムの才媛の姿とは
無様で非常にいいですね」

「ッおおおおおオオオッ♡♡♡♡♡
チンポおくまでキてるうッ♡♡♡♡♡」

クリトリスシゴかれながら
子宮押し潰されるのっ
気持ち良すぎるッ♡♡

脳、焼き切れ——ッ♡♡



「プロフェッサー様あ♡
リオのおまんこ穴あ★
もっともっとイジめてください♡♡♡
「スイッチが入りましたね
いい傾向です」

「まあコレでは神秘の家畜どころか
肉便器ですが——ねっ！」
「ッおおおおおおおッ♡♡♡
バックでチンポきたああああッ♡♡♡」

「あー♡
(あっ…♡
私、こんな…
お尻まで振って…っ♡)

「イルン♡

だめ——♡
脳が快楽で塗りつぶされて♡
まともに思考できない♡♡

「では中に出しますよ
奥で受け止めてください」
「中っ!?中は、——っ
妊娠の可能性が——♡」

「さすがはミレニアムの才媛ですね
この快楽でも廃人にならないとは」

違う、ちゃんと解ってる——
これが、私の——

合理的^シ結論^セ



「ふふ、これからずっと可愛がつてあげますよ
神秘の力を搾り取るための家畜として、ね」

私、もうこの人の、家畜に



ああ。ごめんなさい、先生



グハ

グハ

「リオ、最近何かあった？」

「ちよつと雰囲気が変わった気がする」

「そうかしら。」

「特に何も」

「変わったことはないわ」



あとがき

このたびは拙作を手にとっていただきありがとうございます。
めんテルです。

前回、前々回のコミケに続き、3冊目の同人誌となりました。
今回は「強い女の屈服」をテーマにブルアカのリオ本でしたが、いかがだったでしょうか。

ブルアカ、どハマりしちゃいましたね。個人的にはあまねく奇跡の始発点は最高でした。ああいう全員で一つの困難を突破するやつに弱いんです。グレンラガンのラストあたりとか。

中でもリオは強さと脆さを併せ持った、屈服に最適のキャラだと思うんですよ(豹変)。リオはプロフェッサーの性処理奴隷兼家畜として末長く暮らしてほしい。

さて来年ですが、音声作品なんかも出せたらなあとか考えている師走の半ばです。

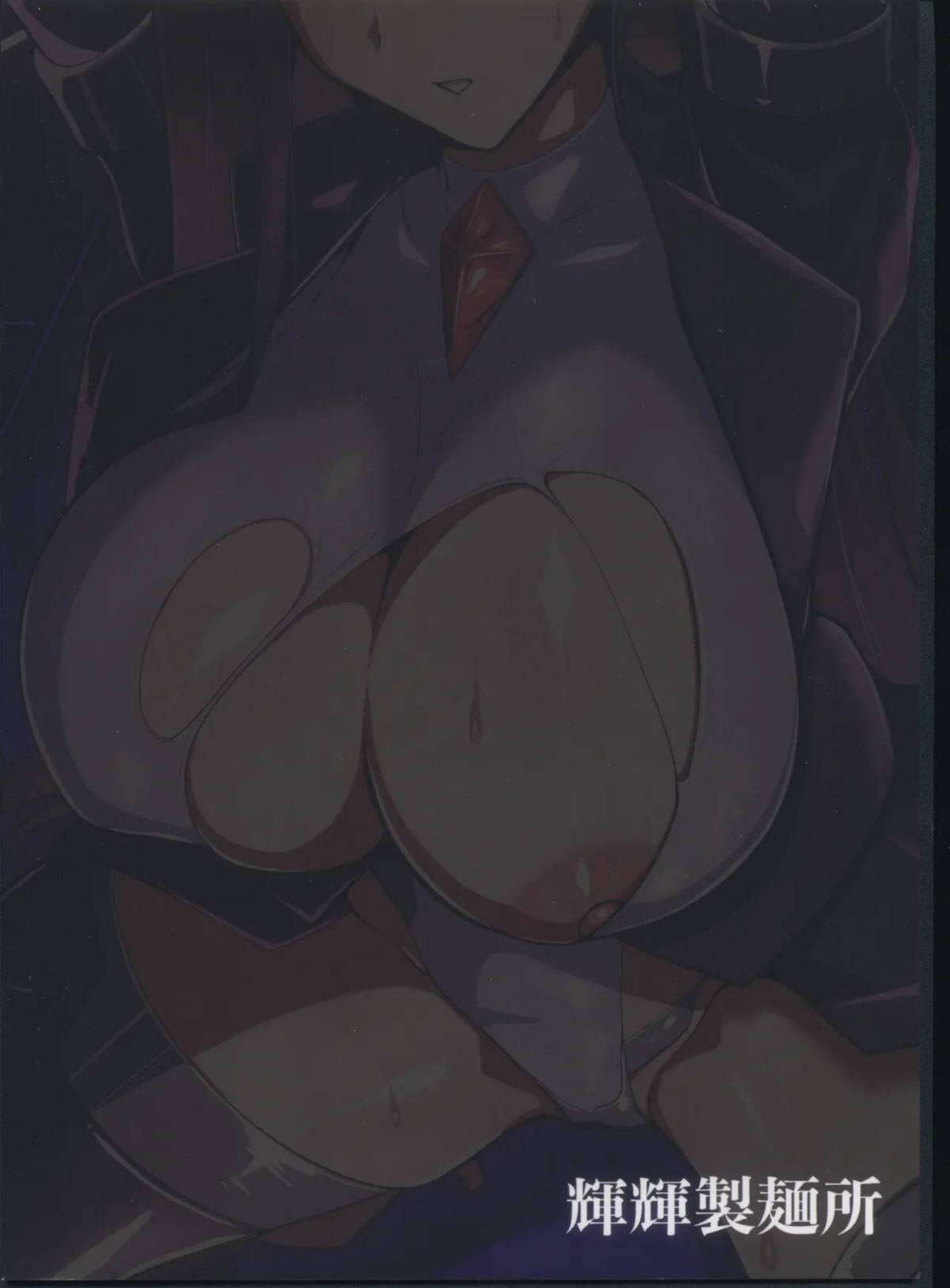
これからも、皆さまのご期待に添えるような作品を生み出していきたいと考えていますので、末長くお付き合いいただけると幸いです。

では次の本でお会いしましょう。
ありがとうございました！

めんテル

奥付

サークル名 : 輝輝製麺所
製作者 : めんテル
X(Twitter) : @men_teru00
Pixiv : men_teru
発行日 : 2024/12/30 コミックマーケット105(2日目)
連絡先 : ktrwest0122@gmail.com
誌名 : 対魔忍調月リオの受難
印刷 : 株式会社ねこのしっぽ



輝輝製麵所